

「事実、主はともにいて」

申命記 2 : 7

September.13.2026

申命記 2 : 7 (パワポ)

Preface

今から 40 年前、土浦市小松にあった旧会堂から今のこの上高津への教会堂移転事業が始まった時、めぐみ教会初代日本人牧師の朝岡茂先生が取り次いで下さった聖書の御言葉は、ハガイ書 1 : 8 の御言葉でした。

「山に登り、木を運んで来て、宮を建てよ。そうすれば、わたしはそれを喜び、栄光を表す。一主は言われる」という聖書の御言葉でした。

この御言葉を主なる神様から与えられた御声だと信じて、当時の教会員一丸となって、この一大事業に乗り出しました。

そして、今から 10 年前の上高津への会堂移転 30 年目を記念した時には、清野先生が、申命記 8 : 2, 10, 14 から「あなたの道のりを覚え、主が賜った良い地を喜び。満ち足りて、心おごり、主を忘れることがないように」という御言葉を取り付けて下さり、主なる神様への感謝を語って下さいました。

それから 10 年経った今日のこの日、献堂 40 周年を迎えた 2026 年、土浦めぐみ教会というキリストのからだとして召し出されたこの群れに、ドンピシャではないだろうかと思われる御言葉が、私の目に飛び込んでまいりました。今お読みした聖書箇所です。

申命記 2 : 7 (パワポ)

正にイスラエルの民たちの荒野での 40 年間の生活のように、40 年前に始まった土浦市上高津 489-1 という広大な荒野のような何もない場所における土浦めぐみ教会の歩みのすべては、主なる神様、主イエス様、聖霊様の祝福であったと、その旅路のすべては、主によって瞳のように守られ（詩篇 17:8）何一つ欠けのなかった恵みに満ち溢れた道のりだったんだと思います。

Part One

私が初めてめぐみ教会を訪れたのは 30 年前の大学 3 年生の時でしたが、その時も、この周りには何もありませんでした。

イオンありませんし、ニトリも、ウェルシアも、住宅展示場もありませんでした。

あるのは、ただただ、だだ広く広がっている田んぼだけでした。

私が初めてめぐみ教会に来ようとした時、大学の聖書研究会の友人に、「めぐみ教会ってどこにあるの？」とその所在地を聞いても、上手く説明出来ない

ほどに何もありませんでした。

「う～ん、周りが田んぼでね、土浦の田んぼの中にある教会。う～んと、あ、そうだ。桜川の土手沿いにある教会かな」

これだけです。

今ならば「土浦イオンの隣にあるでっかい教会」と言えば、直ぐに分かりますが、場所を説明するのにも困るようなある意味「荒野」のような場所にポツンとあるような教会でした。

日曜日の夜の礼拝が終わった後、この礼拝堂の明かりを消しますと、周りに電灯のようなものがほぼないので、真っ暗闇でした。

その夜道を一人で歩くのには、色んな意味で危険だったと思います。

昔からいらっしゃる方はご存じかも知れませんが、イオン側から教会に来る道に、鉄筋ではない木で出来た橋がありました。

でも、その橋なのですが、少し大きな車が通るとよく落ちていた記憶があります。

橋が落ちた時には、しばらくその道を通ることが出来なくなり、市役所の方で復興工事をしてくれるのですが、二度と落ちることのない鉄筋性の橋ではなく、また木製の橋を作り直すのです。

「なんだかなあ」と納得が行かない気がしていました。

この良く落ちる木で出来た橋は、ある意味「荒野」を表す象徴的な存在だったかもしれません。

その名残りなのか、今でもイオンの職員駐車場側の橋は、木製です。

まあ、昔のように落ちやすい木製ではなく、ちょっと丈夫にはなっているようです。

そんな「荒野」のようなところでの教会の歩み・営みは、正にイスラエルの民たちが体験したような「事実、あなたの神、主はあなたのしたすべてのことを祝福し、この広大な荒野でのあなたの旅を見守っていたのだ。この四十年の間、あなたの神、主はあなたとともにいて、あなたには何一つ欠けたものがなかった」という主のご臨在、恵み、満たしに満ち溢れた乳と蜜の流れる地のようだったと思います。

そして、そこには、たくさんの献身の手が、信徒一人一人の献身と祈りとご労と信仰がありました。

この40年の間、たくさんの信徒たちの献身と祈りとご労がありました。

これまで教会に仕えて下さった教職者、教会事務、長老役員、マナ愛児園の先生方、喜楽希楽サービスの職員方、森の学園の先生方、からしだねの職員方のみならず、礼拝を献げることをもって仕え、尊い献金をもって仕え、隠れたところで掃除することをもって仕え、送迎で仕え、子どもたちに御言葉を説き楽しませることをもって仕え、音楽をもって仕え、祈りをもって仕え、御言葉を分かち合うことをもって仕え、小さな奉仕をもって仕え、挨拶をもって仕え、

人を慰め励ますことをもって仕え、作り食べることをもって仕え、ただそこに存在しているという存在そのものをもって仕え、数えればきりがなくらいのたくさんの神の家族お一人お一人の献身によって献堂40年の歩みが守られて来たように思います。

当然ながら、そのすべての献身にはお一人お一人の汗と涙が滲んでいることと思いますが、その主権者は主なる神様でした。

父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体なる私たちの神様が、事実、私たちのしたすべてのことを祝福して下さいました。

この広大な荒野での私たちの旅を見守って下さり、この40年の間ひと時も離れずともにいて下さり、何一つ欠けたものがなかった、キリストが教会のかしらであり主であるという事実が明らかにされた歩みだったのだと思います。

特にこの10年間は、主任牧師の交代、コロナウィルス感染による教会活動の制限、水害と、教会にとっても大きなチャレンジのひとつだったと思います。

でもそのすべてが、私たち人間の思いではなく、神の御心であり、神のご計画であり、神の恵みと祝福を味わわせて頂く尊いひとつ時だったように思います。

そして、どうしても忘れることが出来ないのは、40年前に、ここ上高津への会堂移転を決心された当時の教会員の方々の信仰です。

100名ほどの信徒が精一杯の献金をし、個人融資をし、役員の方々が所有している土地や建物を担保にして、銀行から40年前のお金の価値で1億5千万円の借入をしながら、毎月135万円ずつ返済するという、もし返済出来なかったら、建てた教会と役員さんたちの土地や建物が銀行に取り上げられてしまうという生々しい、主への生きた献身を覚悟する信仰がありました。

そのおかげで、今私たちはこのような立派な会堂で一堂に会して、快適に礼拝を献げることが出来ているという原点を忘れるわけにはいかないという思いが湧いてきます。

と同時に、こんな立派な礼拝堂で礼拝出来ていることを本当に恵みとして私たち覚えながら、信仰の先達たちのそんな生々しい主への信頼が、献身が、今ここで礼拝を献げさせて頂いている今の私たちにあるのだろうかとも思わされてしまいます。

皆さんに負担を与えたいと思っているのではなく、本当に、真に、身を切る、この身を神に喜ばれる生きたささげ物として献げる生きた生々しい信仰が私たちにあるのだろうか、今日の説教を準備する中で問われるような気が致しました。

Part Two

箴言1：7に、「主を恐れることは知識の初め」という有名な御言葉がありますが、この説教を準備する中で、この箴言1：7の御言葉が思い浮かんで来

ました。

「もしかすると、『主なる神様を信じている、主イエス様を信じている』と言いながら、主を恐れるどころか、主なる神様をなめてはいないだろうか？」という思いが湧いてきました。

例えば、40年前の信徒たちお一人お一人の姿と相まって、子供から大人に至るまで私たち人間みんなが大好きな物、私たちの心がすべてそこにあると言っても過言ではないかもしれない、正に唯一無二の偶像お金において、そのお金を主に献げるということにおいて、神様をなめてはいないだろうか？

40年前、朝岡茂先生がお語り下さったハガイ書の御言葉に、「神の宮が廃墟となっているのに、あなただけが板張りの家に住む時だろうか。あなたがたは自分の家のためには走り回るけれども、私の宮のために走り回ることはなかった。信仰者としてあべこべだから、食べても満ち足りないし、飲んでも渴くし、服を着ても温まらないし、どんなに金を稼いでも、穴の開いた袋に入れるようなことになっている」（ハガイ書1:3-11）というイスラエルの民たちに語り掛けられた御言葉があるけれども、それと同じようなことになってはいないだろうか。

家のためには新品の掃除機や冷蔵庫は買うけれども、教会には使い古した掃除機や冷蔵庫を持って来て、献品だと言ってはいなかっただろうか。

板張りの我が家のためなら命張って働くけれども、主の宮のためには…どうでしょう…

マラキ書3章で、「あなたがたはわたしのものを盗んでいる。あなたがたは、十分の一という奉納物・献品献金においてわたしのものを盗んでいる。十分の一をことごとく携えて来て、わたしの家の食物とせよ。そうしてわたしを試してみよ。わたしがあなたがたのために天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうか。わたしはあなたがたのために、あなたがたの実りを滅ぼさないようにし、畑のぶどうの木が不作とならないようにする」と言われているのに、主に喜ばれるような献げる信仰生活を送ってきただろうか。

お金を神としてしまう程に大好きなお金は恐れるけれども、神様をなめてはいないだろうか。

「安息日を守って、これを聖なるものとせよ」（申命記 5:12）と言われているけれども、主を礼拝する主日を何よりも大事にする、守るということにおいて、神様をなめてはいないだろうか。

神の言葉である聖書を読み、聞き、従うということにおいても、聖書の言葉よりも人の言葉、神の言葉よりも自分の言葉、神のさとしや御教えよりも、自分の経験、自分の感覚、自分の知識に聞き、従うことをもって、神様をなめてはいないだろうか。

「人を愛しなさい。人を自分よりもすぐれた者と思いなさい」と言われているけれども、自分が可愛い、自分の方が優れている、自分の方が知っている、あの人には見えてないけれども自分には見えていると思いながら、事実上、イエス様をなめてはいないだろうか。

「神を愛しなさい」と言われているけれども、神を愛している風で、実のところ、自己愛でしかない。

そして、結果、「神を恐れる」という知識をないがしろにしている。

主なる神様を恐れるという知識の初めにも、本当は至れていないにもかかわらず、「神を知っている」と変な自負はないだろうか。

私の場合、牧師なので、人前で聖書のお話をするために、人よりも少し多く聖書を読み込んでいるからとか、どんなに収入がなかった時でも、最低限十分の一以上の献金生活を送って来たとか、毎週の礼拝は当然のように守っているからとか、賛美が好き、御言葉が好きとが言いながら、実のところ、真に神を恐れることなく、それらの行いを自分の功績にしまい、神をなめてはいないだろうか。

神の恵みを自分の功績にしている、してしまいがちな罪が今も私の中に住んでいる、本当にみじめな人間であることを認めているだろうか。

いや、認めるしかない。

だから、また礼拝を献げるし、だからまた聖書を読むし、祈るし、考えるし、悔い改めるし、神を恐れる知識を大切にしたいと願っている。

こんなことが、40年間の何一つ欠けたものがなかった、見守って頂いた主の祝福を思い巡らした時、思い浮かんで来ました。

皆さんは、いかがでしょうか。

土浦めぐみ教会は、着実に主にあって、規模や数の面において成長して参りました。

霊的な面においてもだと思いたいですが、実際のところ、どうなのでしょう。

Part Three

日本全国におけるクリスチャン人口比と変わりなく、土浦めぐみ教会が属する地域社会において、土浦めぐみ教会はごく少数の群れです。

土浦めぐみ教会を一步出ますと、まだイエス様をご存じない方々で満ち溢れています。

お隣の巨大艦隊のようなショッピングモールに押し寄せる人波に比べたら、めぐみ教会への人波は、まださざ波程度かもしれません。

イエス様の愛を、神の愛をご存じでない方々の方がはるかに多く、たましい・霊に飢え渴きを覚えている方々に満ち溢れています。

私たちのこの地における宣教の働きは、まだまだ途上です。

主にある幸いを示し、愛し合うこともって私たちが主イエス様の弟子であることをすべての人に認めて頂き、一人でも多くの方々に主イエス様の懷に抱かれる決断を下して頂き、永遠のいのちと救いの恵みに与って頂き、新しい天と新しい地へと導き出されていくための途上ですね。

使徒の働き 2 : 6 を見ますと、聖霊に満たされた弟子のペテロが、「金銀は私にはない。しかし、私にあるものをあげよう。ナザレのイエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」という言葉がありますが、このペテロの言葉が、私たち土浦めぐみ教会に繋がる一人一人のいのちとなり、生き方となり、働き方となり、私たちの置かれている家庭で、職場で、学校で、地域社会で、友人関係の中で、イエス・キリストの名によって立ち上がり歩く人々が起こされ続けていくことを願わずにはいられません。

また、そのような私たちの願いは、主イエス様の願いでもあると思います。

聖書の御言葉の通り、人は金銀によって救われることはありません。

イエス・キリストによって救われます。

人は金銀によって幸いになるのではなく、イエス・キリストにあって初めて幸いを知ります。

ブレることのないこの事実のうちに、主イエスが再臨されるその時まで私たちの歩みは続くんだと思います。

40年間主に見守られ、何一つ欠けたものがなかった祝福の旅を歩んで来た私たち土浦めぐみ教会という群れに、なおも主から期待されていることは、イエス・キリストの名によって立ち上がり歩く人々が、この群れを通して起こり続けていくことだと思います。

Conclusion

私たちは、ただ集まっているだけの群れでもなく、ただのコミュニティーでもなく、主が愛して下さっている主の宝の民です。

主の御心がなされ、主の愛が感じられ、主の救いと癒しと励ましがあるキリストのからだです。

人が、何かを成すための道具や手段ではなく、人が、神の目的となっている憩いの場です。この憩いの場が、さらに一人でも多くの方々にとって、天の御国の前味を味わえる場となり続けることを祈らずにはいられません。

続く主の導きと祝福を信じ、期待し、神の国と義を第一にしながら約束の日を夢見て、これからも共に歩んで行きましょう。

主イエス様の御旨がなることを願います。

最後に、めぐみ教会の歩みを映像をご覧頂きながら振り返り、その後お祈りしたいと思います。ご覧ください。

祝祷：申命記 2 : 7